

# 「いのち」プロジェクト

横山 洋子

私が教師になった年の秋、友人が自殺しました。ずっと演劇活動を一緒にしてきた仲間の一人でした。葬儀の翌日、私は担任していた小学二年生の子どもたちに何か伝えなければという衝動にかられ、「いのちの授業」を試みました。新任教師のつたない授業でしたが、子どもたちは担任の涙に驚き、真剣に話を聞いてくれました。

いじめによる自殺や、ちょっとしたことで友達を刺してしまうような痛ましい事件が起きる。今、命の重さを子どもたちにどのように伝えていくかということ、子どもにかかわる一人ひとりの大人が真剣に考えていかなければならないでしょう。全国で多くの教師や医師や体験者などによる「いのちの授業」が行われています。そこで

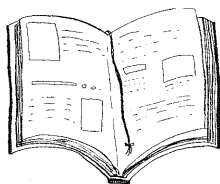
は、絵本も教材としてよく使われます。

ここでは近年出版された、命について考えさせられる絵本を三冊紹介します。

『いのちのおはなし』（日野原重明・文 村上康

成・絵 講談社）は、日野原氏が二〇〇三年に、

お茶の水女子大学附属小学校で始めた「いのちの授業」の再現としてできた絵本です。日野原氏は、「命はきみたちのもっている時間だといえますよ」と子どもたちに語りかけます。「時間を使うことは命を使うことです」「これから生きていく時間は、それがきみたちの命なんですよ」。そして



て、あとがきで「こころ」について、「お互いに手を差し伸べ合って一緒に生きていくこと。自分以外のことのために自分の時間を使おうとすることです」と述べています。

日野原氏の言葉から、命は自分に与えられた限られた時間であることが意識されます。この絵本に出合った子どもたちは、素朴に長生きしたいと願い、時間を大事に使おう、人が喜ぶことを進んでしようと思うでしょう。そして、自分のできることは何だろう、したいことは何だろうと考えるようになるでしょう。毎日のことで精一杯になりがちな大人でも、絵本の中のように、誕生した時間を0とした数直線を引き、現在の自分の年齢の所に印を付けると、あと残りの数十年をどう生きるか、真剣に考えずにはいられません。

この絵本を読んで、「一日一生」という言葉を

思い出しました。今日だけが一生であると思ひ、明日がなくても悔いのない一日を過ごすということです。そうした一日一日の積み重ねが人生であり、そうすることで一生を納得のいくものにできるのです。

次に取り上げるのは、『いのちのまつりーヌチヌグスージ』（作・草葉一壽 絵・平安座資尚 サンマーク出版）です。この本は、命というものを自分のご先祖さまを意識させることによって、その神秘に気づかせてくれます。後半の畳まれたページは四倍に広がり、そこには増え続けるご先祖さまの顔、顔、顔！ 子どもたちは驚きの声を上げるでしょう。

この絵本から子どもたちは、自分にはさまざまな時代を生きたご先祖さまが大勢いること、太古からつながっている命が今、奇跡的に自分に

ぐつてきたこと、このバトンを次の世代に渡さなければならぬことを、目の前で新しい世界が開けていくように、じわじわと感じることができましょう。現代は個人の幸せを追いかけることがもっぱらの関心事ですが、自分は一人で生まれて一人で生きていくわけではないことにハッとさせられます。また、日ごろ、意識にはのほらぬ血族のつながりを意識することになります。

陶彩画家の草場氏は、父親を亡くした経験から命の大切さを伝えたいと、二〇〇四年五月、自費出版でこの絵本をつくったそうです。「与えられた命を今、輝きながら共に生き抜くことがヌチヌグスージⅡいのちのまつりである、という想いをこめた」と語っています。

この絵本を読んだ後には、たくさんのご先祖さまがいつも自分を空の上から応援してくれている

ような心強さを感じるから不思議です。

今年、この絵本の続編『つながっている！ーいのちのまつりー』(同)が出版されました。

この本は、「人はみんな生まれてくるまで、お母さんとへその緒でつながっている」ということを意識させてくれます。どんなに偉そうな人も、人はみんな、昔は胎児だったのです。母親とへその緒でつながれていなかった人はいません。母と子は、元は同じ肉体であり、同じ血液や体液が流れていたのだということに子どもたちは気づくでしょう。

この絵本の中にも、一ページが九倍に広がる大きな絵が折り込まれています。そこには宇宙の彼方、銀河系を思わせるような、へその緒でつながってプカプカ浮かんでいる千人以上の胎児たち！ 胎児同士がへその緒でつながるといこと

は実際にはありませんが、お母さんが胎児のころ、おばあちゃんが胎児のころというように、時間を超越した描き方をしていると解釈するとよいでしょう。

草場氏は、「おへそを見るたびに思い出ししてほしい。どんな時代も生き抜いてきた、たくさんのお母さんがいたことを。おへそに触れるたびに感じてほしい。お母さんを通して命はひとつにつながっていることを」と呼びかけています。

「いのち」を考えることは、どう「生きる」か、「死」をどうとらえるか、ということにもつながっていくでしょう。自分の命を大切にしながら人の命も大切に、そのような生き方ができる子どもたちを育てていくことが、私たち大人の使命だと感じています。

(千葉経済大学短期大学部)